

木村定三コレクションの熊谷守一 —手帳等を手掛りに見る熊谷作品群形成の軌跡

足立 好弘*

はじめに

木村定三コレクション（以下、コレクション）に含まれる熊谷守一の作品群は、この画家とその画業について論考を試みようとすると、常にその核となる程に異彩を放つ内容となっている。定三氏と熊谷守一との関わりは、もとよりコレクション研究にあっても最も重要なテーマの一つだが、今後ますます深化するであろう熊谷守一研究の分野においても重要なテーマの一つとなることに異論はないだろう。当館では、木村美保子氏よりお預かりしている15点の手帳等資料¹によって、コレクション形成の実際を時系列に把握し、そこから両者の関わりを詳らかにすることが可能になった。

今日見るコレクションの姿は、定三氏が、長い時間に渡って収集し、ときどきに再評価を繰り返すなか、収集品の質を常に純化・洗練させた賜物なのだが、このプロセスは、熊谷作品群の形成においても同様のことである。本稿は、先述15点の手帳等資料を手掛かりに、両者の交流とコレクションにおける熊谷作品群形成の跡を辿り見るものである。

「熊谷守一に始まり、熊谷守一に終る」²

定三氏と熊谷守一の出会い³は、1938年12月、名古屋丸善で催された「新毛筆画展覧会」にはじまる。ときに定三氏25歳、熊谷58歳のことであるが、その交流は、熊谷が鬼籍に入る1977年8月まで、実に39年続くところとなった。現在、コレクションに引継がれている熊谷作品は214点を数えるが、手帳資料の記載から定三氏は、生涯で458点を収集したと確認できる。本稿では、後述（105頁）する両者の交流の経過によって下記のように4つの時代に区分整理した。

第1期. 1938年～1944年

第2期. 1947年～1954年

第3期. 1955年～1964年

第4期. 1965年～1979年

第1期. 1938年～1944年

名古屋丸善で催された「新毛筆画展」での出会いから1944年まで、戦前戦中の記録を見てみたい。この時期の収集履歴は、1944年を以て一旦区切りとなるが、恐らくそれは、日々に悪化する戦局とそれに伴う交通事情、郵便事情等の困難所以と推測される。以後、熊谷作品の収集は敗戦後まで持ち越される。一方で、この1944年は、考古遺物である鏡、古硯等、そ

*足立好弘：平成26年度より愛知県美術館所蔵作品、とくに木村定三コレクションの調査研究に協力する。

1 長屋菜津子・足立好弘「特別寄託『木村定三氏手帳等の資料』について」『愛知県美術館研究紀要第24号 木村定三コレクション編』、愛知県美術館、2018年、15～21頁

2 下記文献中の木村定三氏の言葉。「価値判断の物差」『南画研究20』第2巻 第12号、中央公論美術出版、1958年。

3 この出会いから1963年1月22日まで、両者の間に交わされた書簡が下記にまとめられているので、合わせて参照されたい。石崎尚・福井淳子（編）「木村定三と熊谷守一をめぐる往復書簡（翻刻）」『愛知県美術館研究紀要23号 木村コレクション編』愛知県美術館、2017年、001(131)～025(107)頁。以下、同文献を示す際は「往復書簡」と略す。

の後のコレクション形成にあつて重要な柱となる作品収集に先鞭をつけた年でもある。時代の制約を受けつつも、尚、定三氏が、旺盛な探究心、好奇心の網を張り巡らせていたという事実も手帳資料は示している。

この時期に収集された熊谷作品は155点を数える。その内訳については表を参照されたい(105頁)。

最初の収集⁴が、1938年12月「新毛筆画展覧会」にはじまることは先述した。そこで求めた《蒲公英と蝦蟇》(KT343)⁵について、手帳に書添えられた評価記号⁶と「神品ナリ」⁷のコメントからは、熊谷作品と出会えたことへのただならぬ高揚感がうかがえる。同展では、後年、収集作品から割愛された《蝗》《鶯》⁸を加え、都合三点の日本画を購入しているが、その場でこそ見送ったものの、日ならずして熊谷より追加購入した《蝦蟇に蟻》(KT344)と合わせ、この出会いの高揚感こそが、以後39年に及ぶ熊谷守一との交流を決定付けたと言っても過言ではないだろう。この年の収集作品は4点である。

翌1939年の収集作品は2点であるが、うちコレクションに引継がれている一点に、熊谷の油彩画として最初に収集された作品《麥畑》(M279)が確認される。同年9月の第26回二科展出品作品として、「六号板 場所：松原湖北牧村。制作当時、画面に落款ナカリシヲ昭和二十八年十一月片假名ニテ右上隅ニ入レタリ」との定三氏の覚書が添えられている。

1940年の収集は、《富士山に蕃南瓜》(M236)にはじまる。1938年12月の名古屋丸善「新毛筆画展」に出品された作品であるが、《蝦蟇に蟻》と同じく、その場での購入は見送り、後日熊谷に連絡を取って入手したものである。ときに定三氏の場合、この様な経過を辿ることはしばしば見られ、作品への評価も当初の○から後年○○○へと変更されている。評価の変更も手帳上に度々確認され興味深い。相対評価のなかで作品の価値を見極めていくという、定三氏の美術品収集におけるスタンスが、熊谷作品群形成の過程でも変わらない証左であろう。

この年収集した日本画で現在コレクションに確認される作品は、《富士山に蕃南瓜》を含め12点を数えるが、《観世音菩薩》(M211)、《仔猫》(M187)、《不動明王》(M201)、《双鶏》(M188)、《柿》(M2460)などの作品は、手帳から殊に定三氏の思いの強さが伝わる。《富士山に蕃南瓜》を除き全て1940年制作の作品である。

《観世音菩薩》は、定三氏が熊谷に特に画題を指定した委嘱作品⁹であり、その対幅となった《不動明王》も同様の委嘱作品¹⁰である。尚、当初手帳に記載されたタイトルは不動尊であったが、後日現在のタイトル《不動明王》に書き改められている。

5月の大阪阪急毛筆画展で入手した《仔猫》には、「熊谷さんの如し」と、定三氏と熊谷の交流が密になって行くなかに垣間見られる微笑ましい記載が添えられている。猫を画題とした作品は、コレクションに11点を数えるが、《仔猫》はその端緒となった作品である。定三氏は述べている。「《蒲公英に蝦蟇》という作品は法悦感の画の適例で、たんぽぽの香にひたって恍惚感にある蝦蟇の表情、姿がよく描かれている。この蝦蟇の感情が画を見る人に感情移入されてその人に法悦感をいだかせる。この法悦感作者にそれがあってこそ表現が可能である。眠っている猫や花の画など熊谷さんには法悦感のある画は非常に多い。」¹¹作品に添えられた簡潔な言葉には、この謂いに通じるものが籠められているのであろう。《双鶏》

4 経緯は下記に詳しい。石崎尚「愛知における木村定三と熊谷守一のネットワーク」『愛知県美術館研究紀要23号 木村コレクション編』愛知県美術館、2017年、95～96頁

5 以下、作品が現在の木村定三コレクションに引継がれている場合、KTもしくはMから始まる番号を作品名の後ろに記す。

6 評価記号の詳細については下記を参照。前掲「特別寄託「木村定三氏手帳等の資料」について」20～21頁《蒲公英と蝦蟇》○○○○○○○

7 収集された熊谷作品中、「神品ナリ」のコメントが付された作品は4点存在する。それらは全て日本画であり、且つ1938～1944年に収集された作品である。その4点とは《蒲公英に蝦蟇》(KT343)、《鯉》(M2868)、《鳥》(M2865)及び1995年にコレクションより割愛された《枯木小禽(小鳥)》である。

8 《蝗》は1977年、《鶯》は1978年まで、収集作品中に確認される。《鶯》には△の評価記号が記載されている。

9 前掲「往復書簡」129頁(書簡0040)

10 前掲「往復書簡」124頁(書簡0160)

11 木村定三「厳肅感と法悦感 熊谷さんの芸術」木村定三編『熊谷守一作品撰集』大阪フォルム画廊、1969年、3頁

には以下の所見が添えられている。「熊谷守一「双鶏図」ハ所謂遠近感ヲ超越セル繪ナリ即雄鶏ガ雌鶏ノ上ニ乗ッテキルモノニ非ズ又雌鶏ノ前方ニ居ルノニモ非ズ。雌鶏ノ向側ニキルモノナリ。然レドモ足ヲ画ケルハ即遠近法ヲ超越セルモノナリ。」

同時期に「柿」を画題とした作品が2点記載されている。その一点が現在もコレクションに引継がれている《柿》(M2460)であるが、別個に後年コレクションから割愛された《柿》△も存在した。前者は定三氏の早世した令弟四郎氏が熊谷に懇願した作品¹²であり、当初は四郎氏の収集品であったわけである。後者は定三氏が12月の丸善個展で求めたと推定される作品である。四郎氏の《柿》がどの時点でコレクションに引継がれたのか、もとより手帳上の記載のみで断定するには無理があるが、この時期、熊谷に仏画を依頼した定三氏にして、四郎氏の《柿》に添えた「佛画ノ感アリ」の所見は、早世した令弟への手向けでもあるとの見方もできなくはないだろう。対して油彩の収集は、12月の丸善個展での《高原》(M269)を見るのみである。

熊谷の書については、この年が収集のはじまりである。定三氏は出会った当初から日本画、油彩画と同等の重きを置いていたようである。それは後年、自らの監修で『書 熊谷守一』なる豪華本を上梓したことからもうかがえる。

《流水不爭先》(M232)、《心月輪》(KT72)、《無》(M231)、《擊竹一聲》¹³ (M239) の4点は、12月の丸善個展のため、名古屋で定三氏のもとに滞在した折の作品である。《心月輪》について定三氏は言っている。「箱書きの書の立派さに感心して熊谷さんに書を書いてもらった。おそらく熊谷さんとしては頼まれて書を書いた最初であろう」¹⁴。一人の収集家としての枠を超え、言ってみればプロデューサーとしての立位置から熊谷に接した最初であり、ここにも定三氏ならではのものが見えるだろう。

1941年は、《秋冬貼交屏風》(M1854)、《桜・蝸牛扇面貼付風炉先屏風》(M2206) にはじまる。《秋冬貼交屏風》は、作品成立の背景を知る資料¹⁵は確認されているが、手帳には「二枚折風炉(呂) 先屏風半双(秋冬) 他半双は分解ス(春夏)」と添えられていることが興味深い。作品の入手は5月、丸善での第四回双弦会日本画展と考えられるが、そのときの二曲一双から半双がコレクションに引継がれている《秋冬貼交屏風》である。対して《風炉先屏風桜・蝸牛扇面張込》への添書きには「風呂先扇面張込(櫻扇面 蝸牛扇面) 風呂先ニ仕立ル」とある。ここで分解された半双が、《桜・蝸牛扇面貼付風炉先屏風》として今に引継がれた作品と思われる。仕立て直された時期の記載こそ見られないが、両作品は同じ頁に併記されていることを見るに、同年中のさして日を置かないときと推定される。この年収集した日本画は全てで12点が引継がれている。内11点は同年の作、《猫》(KT92) のみが1940年作である。「熊谷先生曰ク、猪飼氏ノ蝦蟆ヨリ良シト」¹⁶の言を書添えているが、1964年に額装した折、評価を◎から◎◎◎へと改めている。

さて、この年の収集は前述した日本画の他は、熊谷による絵付け陶器に限定されている。熊谷絵付けによる陶器がコレクションに加わるのは、1941年の村瀬善九¹⁷と早川春泰¹⁸、後述する1947年の加藤青山¹⁹だけである。いずれも瀬戸の陶工との共作となる。内訳は、善九と

12 前掲「往復書簡」127頁(書簡0080)

13 「香巖和尚の故事」と手帳には記載されている。

14 木村定三「熊谷守一の書」木村定三監修『書 熊谷守一』神無書房、1980年

15 前掲「往復書簡」117頁(書簡0370)

16 猪飼正一(1901~1961)、御園座4代目社長(在1950~1961)

17 生没年不詳。

18 生没年不詳、コレクションには熊谷絵付けの5点を含む18点が引継がれている。1947年12月の《志野茶碗 銘「神路山」》(M821) が最後の収集作品となっていることから、没年は1948年直後の早い時期とも考えられる。手帳への記載では1946年11月の収集として、《志野茶碗(大) 銘「大樽垣」》が「喜寿祝トシテ翁ヨリ受領」と付記の上記載されている。そこから逆算するに生年は、1869年と見ることもできるが、コレクションにこの作品が引継がれていないこともあり検証はできていない。

19 1886~1966、瀬戸陶芸協会の創設に尽力。

の作品²⁰が10点（壺2、花瓶3、一輪挿1、茶碗2、盃1）。内、壺2、花瓶3、盃1がコレクションに引継がれている。そして、春泰²¹との作品が《盃》（M2228）、《紅梅》（M768）、《蝸牛》（M769）、《熟柿（志野茶碗 銘「秋色」）》（M770）、《かまきり》（M771）の5点である。

これら春泰との共作5点は、全てコレクションに引継がれている。善九との共作は、双弦会との関わりであることは明らかになっているが、春泰との共作は定三氏独自の企画のようである²²。

定三氏と春泰の出会いが何時なのか断定しがたいところはあるが、手帳資料の記載から、この年熊谷との共作とは別個に6点の春泰作品を収集している事実が明らかになっている。このことから、両者の間には、既にある程度密な関係ができていたことは確かなようである。善九と熊谷の共作で、「紙に描いた絵とは別趣の面白さ」²³を見出したとき、ならばと、この時期、密な関係ができていた春泰の作陶に、定三氏一押しの画家熊谷の絵付けでという形で企画したことは当然の運びだろう。4つの茶碗には全て即中斎の銘が冠されていることも合せ、両者の共作に寄せる並々ならぬ思いが想像できよう。ここにも見られるプロデューサーとしての定三氏の顔である。

1942年は、計7点の収集が確認される。内コレクションに引継がれている作品は、日本画2点、油彩画1点である。日本画の1点は《蜻蛉》（M271）、もう1点は《蟲いろいろ画帖》であるが、この6点の作品からなっていた画帖は、後日解体され《機織虫》（M2465）が引継がれるのみである。2点の日本画は1942年の作、油彩画《高原ノ道》（M267）は、1940年の作であり、同年2月催された名古屋丸善個展にて購入の《高原》と出品を同じくした作品である。

1943年は、計23点を収集している。内コレクションには日本画5点、油彩画1点、書2点が引継がれる。5点の日本画、《蟻》（M222）、《熟柿》（KT338）、《富士山に鳥》（M244）、《富士秋景》（M265）《山吹に蜂》（M277）は全て1943年の作品である。《富士山に鳥》、《富士秋景》に並んで、同時に購入された《冬富士》²⁴と題される作品も記載されている。連作的な性格を帯びていた作品である可能性もあるが、これらの作品はコレクションから割愛されている。ちなみに《冬富士》には（鉛筆着色）と記載されているが、ここではじめて見られるコメントである。1939年ごろを境にはじまる、物象を太い線で区切る表現とはまた別の新たに模索される表現の面白さを指摘しているのだろう。油彩画は1点を数えるのみであるが興味深い作品である。この年熊谷は、定三氏の招待で信州上林温泉に湯治に赴いている。その折のスケッチを元に描かれた作品が《熊の湯》（M2469）である。「昭和18年作、笠岳と白樺（志賀高原）を熊の湯より寫ス」²⁵と添えられているが、当初のタイトルは《笠岳と白樺》だったようである。とき同じくした作品として更に1点、《鉢山》「昭和18年作、鉢山（志賀高原）四号・四郎、猪飼氏ラト上林旅行ノ際ノ作品」も収集されるが、後年コレクションより省かれる。作品についての添書きから令弟四郎氏の同行が判る。

この年収集された2点の書、《蒼蠅》（KT73）、《清風拂明月》（がせん紙）（M224）は、評価の高い書である。あえて画仙紙を用い、滲み・擦れの効果を狙った作品のようであるが、引継がれていない書《清風拂明月》（五字一行竹筆書き）との関連が大きい作品であるとも考えられる。この辺りとも関連するのだろうか、熊谷は「筆の先は命毛といってひじょうに大事にされるところだが、先がなくて木炭のように硬くなったものも、ときにはまた書きや

20 前掲「往復書簡」118～119頁（書簡0330、0340）

21 前掲「往復書簡」116頁（書簡0390）

22 前掲「愛知における木村定三と熊谷守一のネットワーク」99～100頁

23 前掲『熊谷守一作品撰集』12頁

24 前掲「往復書簡」112頁（書簡0530）

25 前掲「往復書簡」111-112頁（書簡0530、0540）。この湯治旅行が8月であったことがわかる。

すいものです。」²⁶と語っており、その竹筆を用いた味わいの面白さゆえか、定三氏は熊谷の書のなかで最上位にしている。

1944年は42点の作品を収集している。コレクションに引継がれた作品は、日本画14点、油彩1点である。この年の収集品に書は1点も見当たらない。大変に多作且つ質の上でも充実していた年だったことは、手帳の記載からもうかがえる。《鈴虫に胡瓜》(M203)、《白鷄》(M2470)、《蝸牛》(KT335)、《蠅》(M206)、《熊蜂》(M207)、《蟪蛄》(M223)、《鯉》(M2868)、《蟻の会話》(M2464)、《ねぎ》(M272)、《烏》(M2865)、《紅梅》(M242)、《虎》(KT334)、《鳶》(M209)、《機織虫》(KT342)、これらの日本画は全てこの年に画かれた作品であるが、厳選を重ねた上で残された14点であることは、手帳への添書きからも強く伝わってくる。

尚、この年収集され現在コレクションに引き継がれていない作品、先述した《枯木小禽(小鳥)》(「林木百舌鳥」水墨神品ナリ)には、定三氏の収集する古裂を用いて表装がされた(表装の時期は1949年10月)。「古裂利用」という記載はコレクション全体を見渡しても、この作品への添書きが初出である。自身が収集した古裂を用い書画の表装に充てる事は、定三氏が度々好んでしたことであるが、ここでの事例がその最初となった。

油彩画《船津》(M270) 1点は、松坂屋個展で購入した6点内にある唯一の油彩である。

第2期. 1947年～1954年

定三氏による戦後の熊谷作品収集は1947年に再開される。瀬戸の陶工・加藤菁山の作陶への熊谷の絵付けを以てはじまった。この時代に収集された熊谷作品群には、戦前戦中には見られなかったガラス画、クレパス画、彫刻等と、数少ないながらも新たな試みの結果であろう作品が見られる。

この時期に収集された熊谷作品は135点である。一見して日本画が戦前戦中の収集数に比し半数を大きく割るが、油彩の収集数は大幅に増えていることが特徴である。

1947年2月2日に定三氏の熊谷収集は再開される。それは、瀬戸の陶工加藤菁山の作陶に熊谷が絵付けした作品であり、コレクションには3点が引継がれている。内、《熊蜂》(KT68)についての評価は高いとはいえるものの、これを最後に陶工と熊谷の共作作品が収集されることはなくなった。「紙に描いた絵とは別趣の面白さ」を見出したとき、1941年には、定三氏が信頼する春泰との共作を企画したと思われるが、その春泰が、この時期既に作陶が困難になっていたとしたら、定三氏の関心もまた「陶工と熊谷の共作」から離れてしまったとの見方のできるのではないだろうか。この年の収集はこの共作陶器のみである。

1948年は、油彩4点を収集したのみである。コレクションに引継がれている作品は《線裸》(KT109)と《谷谷ノ朝》(M256)の2点である。4点の油彩についてその収集の経緯は、個展会場での購入や熊谷への依頼などの従来のやり方とはやや異なるようである。とまれ、《線裸》はその制作年に注目したい。定三氏と熊谷が出会った1938年末は、熊谷の作風が大きく変わりはじめた時期であり、両者の交流は熊谷が「モリカズ様式」といわれるスタイルを確立させていく時期そのものである。そのなかで、定三氏の収集は、常に熊谷の「今の作品」であり、興味関心は「次の作品」に向けられていることは手帳等資料からも読取れるが、この作品は1927年の作、即ち熊谷との交流を持つはるか以前の作品である。あえてこの作品を入手し且つ高い評価をしていることは、この作品に「モリカズ様式」の予兆を見たのであろうか。

1949年、計28点の収集が記録されている。内、コレクションに引継がれている作品は、日本画4点、油彩1点、書5点を数える。日本画を見てみよう。この年の1月、定三氏の尽力により、初の名古屋松坂屋個展が催されている。定三氏が、戦後十数回名古屋で開いたと語る²⁷熊谷の個展にあって、その先駆けである。日本画の内9点は、この個展への出品作品と

26 熊谷守一『へたも絵のうち』平凡社ライブラリー、2000年、156頁

27 木村定三「熊谷守一の人と藝術」『新美術新聞』1972年11月1日号、美術年鑑社

確認される。コレクションに引継がれた4点の日本画《牛》(KT331)²⁸、《枯木に鶉》(M212)、《赤とんぼ》(M184)、《縁側》(M257)は、すべてこの個展出品作に含まれるため、制作は1948年であろう。

尚、後年コレクションから割愛されるが、2月の収集作品に興味深い日本画が1点確認される。《餅に庖丁》のタイトルを持つ作品である。「豎小品 先生宅ノ実景ナリト」の添書きから画かれた時期は前年師走と推測される。

油彩の1点は、《あぶくま川》(M282)で購入は2月である。予て熊谷から聞及んでいた逸話でもあっただろうが、熊谷守一『へたも絵のうち』より抜書きを添えている。「あれはどこに写生に行ったときだったか。細い川と広い土手の景色を描きかけていたら、どこからか牛が一頭やってきて、ちょうど私が描いているあたりをうろうろします。こりゃあ一幅の泰西名画だ、よし牛を描いてやれと考えると描き加えたことがありました。

しかし出来上がってみると、やっぱりおかしい。だいいち牛は一つ所にじっとしているわけではない。こんなもの加えた私が悪かったというわけで牛は消し、また元の風景だけの絵にしました²⁹」。作為を嫌った熊谷らしい逸話として定三氏も受取ったのだろう。

5点の書《年々歳々来無名蟲》(KT74)、《ほとけさま》(KT330)、《すずめ》(KT326)、《からす》(KT327)、《かみさま》(KT329)は、全てが、後年定三氏により監修上梓された『熊谷守一作品撰集』に収載されている。1月の松坂屋個展での入手であり作成時期は1948年であろう。後年、熊谷の個展が催された折貸し出されていることがわかる。

1950年は、計15点を収集している。内、コレクションに引継がれた作品は、《壽野菜》(KT91)、《雨滴》(KT333)、《赤蟻》(M185)、《柿に鳥》(M189)の日本画4点と書2点のみである。全て6月に収集された作品であるが、7月5日付けで、画家の夫人秀子より定三氏に当てた「個展開催」の礼状³⁰を確認できることからその折の収集であろう。《壽 芽出度し芽出度し》(M208)と《壽日月松亀》(M217)³¹の2点が書であるが、《壽野菜》と三幅対に目されているようである。《壽日月松亀》「鶴は今道中」の箱書は、1967年に改装(軸装を改めた)したおり書き加えられたもののようであるが、後年、定三氏が亭主となり、度々催された茶席にも用いられている。定三氏の遊び心とともに、特にお気に入りの一品だったとことがわかる添書きである。

1951年は31点と大変多くの収集をしているが、内、コレクションに10点が引継がれるのみである。コレクション形成に向ける定三氏の厳しさそのものであろう。

3月には、日本画の《白兎》(KT332)、クレヨン画《鯉の親子》(M2463)、《裸婦》(M2851)³²が、コレクションに引継がれなかった日本画色紙《蜜柑》《風景》と合せ一括で収集されている。11月には《普賢菩薩》(KT324)が収集されている。この年より数年に渡り少なからぬクレヨン画の収集を確認できる。

コレクションに引継がれる3点の油彩《引潮》(KT94)、《子牛》(M247)、《蓼科牧》(M274)は、3月、大阪梅田の個展で求めた作品であることがわかる。《蓼科牧》は添書きにより出品年の作画であると判断できる。

書は全て10月の収集である。引継がれた《天下泰平》(M219)と《天上大風》(M234)2点は、1954年の個展にも貸出し出品されていることが記載されている。定三氏監修上梓の作品集にも掲載され、とくに気に入った書に数えられよう。

28 1973年3月4日「利休流無作法茶会」を皮切りに、1997年5月7日「東海道膝栗毛 富士遠望船中遊樂茶会」まで、定三氏は自身が亭主となって都合10回の茶会を開いている。この画は、5回目の茶会で、点心席に掛けられたことが記録にある。木村定三茶会記録『茶道具—金属工芸・竹工芸を中心に 木村定三コレクション』愛知県美術館、2014年、125頁

29 前掲『へたも絵のうち』、152～153頁

30 前掲『往復書簡』111頁 (書簡0560)

31 1989年11月11日、菰還壽茶会は定三氏7回目の茶会。この作品が本席で掛けられた軸であると判明している。前掲『茶道具—金属工芸・竹工芸を中心に 木村定三コレクション』128頁

32 前掲『往復書簡』110頁 (書簡0580) 書簡中に触れられている1月10日付手紙と同28日付端書中には、クレヨン画について、何らかの言及がなされていたのかもしれない。

1952年の収集は、計17点となる。この内、現在コレクションに引継がれている作品は、日本画1点、油彩4点、彫刻2点となっている。定三氏の収集は、同一分野での作品数が多くなればなるほど、取捨選択において厳しさが増すという特徴がみられるが、相対評価の中で、優れた作品を選び抜き洗練されたコレクションを欲する定三氏にとって、熊谷作品としてその例外ではなかったのである。

この年の収集中、1点の日本画《銀杏》(M172)と、2点の油彩《子牛》(KT95)、《上ヶ潮》(KT96)を、定三氏は高く評価している。全て11月個展での収集が確認される。さて、この年の収集された油彩中には、コレクション唯一のガラス絵《笹百合》(KT113)が見られる。定三氏のコメントも「ガラス絵」という以上には一切添えられておらず、いささかの唐突感と不思議さをともなう作品でもある。更には、コレクションに3つ存在する彫刻作品中、2点の収集が確認される。《裸》(KT82)(ブロンズ彫刻)、《はだか》(KT83)である。1951年のクレヨン画と、この年のガラス画及び彫刻、円熟期を向かえ尚新しい表現の可能性を探る熊谷の姿勢がうかがえる。

1953年の収集は、計16点であり、内、コレクションに引継がれた作品は、日本画2点のみである。《眠猫》(KT337)「猫(眠り猫)」及び《種蒔》(M198)、両作品共11月個展での収集である。

1954年をみてみよう。計19点である。ここから、現在コレクションに引継がれている作品は、日本画4点、油彩3点、書3点、クレヨン画2点となっている。コレクションに引継がれた作品数は多いとはいえないかもしれないが、選りすぐりの作品ばかりといえよう。日本画は12月の名古屋松坂屋個展で収集された、《河童》(KT340)、《二匹蝦蟆》(M200)、《蝦蟆》(M245)、《女河童》(M2471)の4点である。コレクション中、銀泥を用いた作品は《蝦蟆》と《女河童》の2点が最初である。

油彩も《土饅頭》(KT97)、《漁村》(KT99)、《ハルシャ菊》(M255)の3点と厳選されているが、何れも熊谷の代表作といえる作品である。《ハルシャ菊》が10月、《土饅頭》と《漁村》が11月の収集である。

《桃栗三年…》(M221)、《鶴は千年亀は万年》(M228)、《緑毛万歳亀》(M235)の3点の書が11月の収集、《千手観音》(KT325)、《裸婦》(M260)の2点のクレヨン画が12月名古屋松坂屋個展での収集となっている。

第3期. 1955年～1964年

1955年に75歳となった熊谷は、翌春、最初の脳卒中の発作にみまわれ、以後、歩行困難をともなうようになっていったと伝えられる。それに伴い作品の数自体も減っているようであり、収集総数の減少もそれを反映してのもののだろう。但し、定三氏の厳選主義の中、熊谷作品群の中核ともいえる作品の多くが、この時期の収集によっている。手帳に記載された作品には、定三氏独自の評価記号が添えられているわけであるが、特別最上位に位置する作品に付された記号「貴」は、《石亀》(1958年収集)に付されたものが最初である。この作品を手にした定三氏が、従来の評価記号だけでは語りつくせぬものを覚え、新たに考えた記号であると推察される。熊谷の最円熟期を目の当りにした定三氏の思いそのものといえるだろう。

この時期の収集総数は96点である。内、コレクションに引継がれた作品は、日本画22点、油彩28点、書7点、クレヨン画2点となっている。

1955年、総数8点と収集の数こそ少ないが、コレクションに引継がれた4点に定三氏は高い評価をしている。

油彩の3点、《西日》(KT98)、《裸婦》(KT110)、《朝の日輪》(KT112)は、12月の名古屋松坂屋個展での収集である。書の1点《六字名号石》(M195)も、油彩と同じ個展での収集であり、全て1954年の作である。

1956年は、11点の油彩と1点の鉄筆デッサンを収集している。コレクションに引継がれ

ている作品は油彩6点であるが、《伸餅》(KT93)、《裸婦》(M246)、《梅》(M258)、《水仙(細描)》(M262)、《水仙(太描)》(M275)、《湯檜曾の朝(ユビソ)》(M2468)と代表作が並ぶ。

1956年五都展出品の新作に混ざり、《湯檜曾の朝》(1940年)、《裸婦》(1937年)、《伸餅》(1949年)と旧作の収集もみられる。《伸餅》については、1949年のコレクションに《餅に庖丁》のタイトルを持つ日本画が記載されていることは先述した。その作品には「豎小品 先生宅ノ実景ナリト」の添書きがされている事実も先述の通りである。この《餅に庖丁》は、コレクションに引継がれておらず、残念ながら両作品を並べた検証は出来ないが、あるいは《伸餅》の習作的性向を帯びた作品であった可能性も考えられよう。

1957年は、1点の日本画《鰻鯉》(M213)、2点の油彩《氏家桃林》(M250)、《焚火》(M2467)を収集している。3点ともにこの年1月名古屋松坂屋で催された個展³³での収集作品である。

1958年の収集作品は、計16点である。内、コレクションに引継がれた作品は、日本画7点、油彩3点である。

日本画の《鯉》(KT339)、《鷗》(M174)、《菜の花》(M178)、《鯰に虻》(M196)、《唯我独尊》(M199)、《拾得》(M2867)、《紙雛》(M2869)7点は、《鯰に虻》を除き大阪梅田画廊での熊谷の個展での収集であり、油彩3点《石亀》(KT100)、《白仔猫》(KT101)、《海の図》(M248)も、《白仔猫》を除き同個展における収集である。

先述したように、評価記号「貴」は《石亀》への評価がそのはじめてであり、殊に1958年と1960年の収集作品には「貴」が多くみられる。

1959年は、5点の油彩が収集されている。コレクションに引継がれている作品は《百日草》(KT107)と《蒲公英に母子草》(M254)の2点である。

1960年は、12月13日～18日の日程で名古屋松坂屋での熊谷守一個人展³⁴が催されているが、ここでの収集が、この年の収集作品の全てである。計9点が収集され、日本画2点、書1点と、5点の油彩《たまご》(KT102)、《雨水》(KT103)、《三毛猫》(KT108)、《裸》(M273)、《百日草》(M2466)が引継がれている。1937年の旧作である《裸》を除きこの時期の作品である。なかでも《三毛猫》の評価は高い。「貴」を力強く○で囲み強調した上で添えられたコメント「三毛猫(吾輩は猫である)」は微笑ましい。

1961年は、計4点が収集される。内、現在コレクションに引継がれている作品は、2点の日本画、《雨だれ》(KT90)及び《地藏尊》(M192)である。《地藏尊》は1944年の作品であり、地藏尊を画題とする作品を定三氏は4点収集しているが、引継がれた作品は、1962年収集のクレヨン画と本作品の2点である。本作は収集の経緯も他の作品と異なるが、翌年収集されたクレヨン画との間には、技法を超えて猶通じるものが見られるように思われる。

1962年の収集は、計14点である。内、コレクションに引継がれている作品は、日本画3点、油彩3点、書3点、クレヨン画1点となっている。1月の松坂屋個展にて収集された、日本画の《野良猫》(M179)と、油彩の《雨滴》(KT104)は、熊谷没後の回顧展(1978年)に出品されている。定三氏が《石亀》、《三毛猫》と並び、熊谷の円熟期を代表する傑作と評価していたことは間違いように思われる。そして、個展での収集とは別に、クレヨン画《地藏菩薩》(M263)が見られるが、前年収集された《地藏尊》(1944年)との間には強く親和性を感じられることも前述の通りである。

1963年、この年の収集は日本画3点でその内《蝸牛》(M2641点)が引き継がれている。

1964年には計16点が収集される。現在コレクションに引継がれている作品は、日本画6点、油彩4点、書2点である。この年、複数回の個展が企画されているが、創作数が減っているなかで、ある程度の画き溜めをした結果であろうか。《猫》(KT92)に添えられた「(白)猫(座姿)貴婦人風日本画」には、猫を画題とする作品には、何か一つ書添えたい定三氏

33 前掲「往復書簡」100頁(書簡0610)12月に催されることが多い松坂屋での個展であるが、「名古屋展はなるべくおそくしていただいた方が好都合」とのなか決まった個展日程と考えられる。

34 前掲「往復書簡」108頁(書簡0640)

の思いも垣間見え微笑ましい。

第4期. 1965年～1979年

1965年より1979年までの収集記録である。定三氏の熊谷収集は手帳から読取れた範囲では1979年に収集された日本画《栗》(M280)が最後となるが、唯、例外的に1点、入手の経緯は不明ながら、1988年頃の収集と推定される日本画《大鵬》(M218)が確認される。

1965年の収集作品は、日本画《蝶とゼラニウム》(M276)が1点のみであり、定三氏は高い評価を付している。

1966年は、日本画の収集数が際立っている。なかで、《芋図画賛》(M2060)³⁵「『芋の図』共箱半切野口米次郎賛『津知(土)薫る薫る若葉にわか蛙』、野口米次郎は、ノグチイサムの父。詩人として有名」との添書きから、野口が鬼籍に入った1947年以前の作品、恐らくは熊谷の日本画として最初期の作品と思われ、あたかも芋銭の「芋図」を思わせる。芋銭の作品を敬愛してやまない定三氏であるが、熊谷との出会いの時期に、「芋銭無き現在、芋銭の如き至純至誠禅味横溢せる名画を描き得る画家は、熊谷先生を措きて他に絶無なりと確信致し居り候」³⁶と書簡に記した定三氏にして、30年近くに及ぶ熊谷収集歴のなか、その原点を思い起させる作品だったのかもしれない。事実後年、定三氏が編した『作品撰集』のなか、野口による画賛を省いた「芋」の絵のみを、絵画の部の冒頭図版に選んでいる。

1968年は、油彩《猫》と、後年に熊谷守一美術館に寄贈される《自画像》が2月に収集されている。その《猫》(眠り、油キャンバス6号「猫の王様」)は、熊谷の作品中、もっとも有名な、そしてもっとも人気のある作品かもしれないが、あらためて、定三氏の評価を見るに興味深いものがある。「猫の王様」と微笑ましいコメントが添えられているものの、この絵に付された評価記号○を見るに、コレクション中の相対として特に高いものとはいえない。対して、前掲《三毛猫》(1960年)には「貴」の評価が付されている。これら2つの作品の間からは、収集において定三氏の審美感の基調にある「法悦感」と「厳肅感」を思いださせられるが、この《三毛猫》が「厳肅感」を代表する猫画として、後述する《三毛猫(眠り)》は法悦感を表象した猫画であると仮定するならば、2つの作品の間にある大きな評価の差異は、多くの鑑賞者にとって理解し難いことのように思われる。この評価の差異の意味するところ、況んや、どちらの作品が優っているかの判断は不可能であろう。畢竟、これら2点の作品の間にみられる評価の差異、それは、熊谷作品を追い続けた定三氏にして初めて分かる美の規範そのものである。ちなみにこの《猫》が、コレクションに引継がれた油彩のなかでは最後の収集作品となっている。

1973年は、日本画、書とそれぞれ1点が引継がれているが、《犬》(KT89)は1958年作の日本画である。定三氏のコメントには、犬の名と思しき名が「ムル」と添えられているが、犬を画題とした作品はコレクション中この1点だけである。《お前百までわしゃいつまでも》(KT77)には「書.94才」と添書きがある。晩年「もっと生きたいことは生きたい。みなさんにさよならするのはまだまだ、ごめん蒙りたい、と思っています。」³⁷と語る熊谷晩年の思いそのものであろう。

1975年に収集された唯一の作品である《緑陰喫茶聞鵲声》(M220)は、後年、定三氏が亭主となって催された「ほととぎす茶会」³⁸に使用されていることから、定三氏の思い入れがうかがえる晩年の書である。

1976年には、6月に2点の書が収集され、《廻し歌 むめがかを云々》(M229)、《波のり舟の廻し歌》(M230)共にコレクションに引継がれている。熊谷生前に収集された書として

35 前掲『熊谷守一作品撰集』芋(部分)図版25

36 前掲『往復書簡』127頁(書簡0070)

37 前掲『へたも絵のうち』12頁

38 1993年5月9日、定三氏が開いた8回目の茶会。この作品が寄付の床に掛けられたことが判明している。前掲『茶道具一金 属工芸・竹工芸を中心に 木村定三コレクション』129頁

はこの2点が最後である。熊谷没後の1979年に収集された前述の日本画《栗》(M280)には「熊谷守一九十六才「栗」(三個) 実物より大きく描かれている」とコメントされている。定三氏はこの作品の上に、尚、長生きし描き続けることを望んだ熊谷晩年の思いを重ねていたのかもしれない。

熊谷は1977年8月1日鬼籍に入る(享年97)。老齡ゆえの創作数の減少もあってだろう。第4期での収集総数は49点であり、且つ収集作品に書の占める割合が大きくなっている。内訳は日本画12点、油彩2点、書25点、クレヨン画1点とシルクスクリーン1点である。ここからコレクションに引継がれた作品数は、日本画11点、油彩2点、書14点を数える。熊谷の存命中では、日本画、油彩は1977年の収集が最後になる。この1977年に収集された作品は、熊谷にとって最後の油彩作品となった《せんのうに黒揚羽》(アゲ羽蝶)である³⁹。当該作品は、コレクションに引継がれておらず、後年、定三氏によって2点の《自画像》と合せ現在の豊島区立熊谷守一美術館に寄贈されたことは周知のとおりである。

現状で、収集の時期を同定できない作品が10点存在する。手帳等資料の更なる精査に加え一層の調査研究が必要となる。

■おわりに

以上、コレクションにおける熊谷作品収集の履歴を追ってきた。定三氏と熊谷の39年の交流を追ってみて、コレクションにおける熊谷作品群形成には、大きく二つ時期があったように思われる。一つ目が、1938年12月の出会いから1944年まで、出会いの時期と言っていだろう。二つ目は、1955年から63年頃までの7～8年であろう。

一つ目の時期、この出会いの時期は、熊谷にとってもモリカズ様式の確立の時期であった。コレクションの核としての熊谷収集。それは、定三氏をして偏にこの出会いのときの「高揚」そのものが契機であったように思えるのである。

二つ目の時期は、晩年期を控えた熊谷の最円熟期ということであろう。熊谷作品を評価するために考えられたと思われる、評価記号「貴」が新たに登場するのもこの時期である。それは円熟期をむかえた熊谷作品の一つ一つに興奮する定三氏の偽りのない心の発露であろう。事実、この時期、コレクション全体を俯瞰しても、熊谷作品に付された「貴」の評価は大変に多く、際立って異彩を放つものとなっている。

今日熊谷の代表作、人気作として知られる作品の多くがこの時期に属するものであるが、一方で、そこでの評価が、必ずしも定三氏が付した高い評価と一致しているわけではないことにも私たちは留意しなければならないだろう。このズレはひとつ興味深い、自身の感性を信じ、熊谷作品に魅せられ、その収集にコレクターとしての自身の全てを傾注させてきた定三氏にしてそれは自然なことであつたろう。「熊谷守一に始まり、熊谷守一に終る」との謂いも肯けるのである。

末筆ながら本稿は、定三氏の未亡人美保子氏による15冊の手帳等資料の特別寄託と、その調査・閲覧が叶ったの賜物である。このことは、美保子氏のご理解とご協力なくしては在りえなかったことは言うまでもない。あらためて謝辞を申し上げる。

39 《せんのうに黒揚羽》(アゲ羽蝶)の収集時期については、手帳の判読困難のために1976年と見ることもできるが、本稿ではひとまず1977年と判断した。

各セルの（ ）内数字はコレクションから割愛された作品の数です。

	収集年	日本画	油彩	水彩・素描(クレヨン画含む)	書	工芸	彫刻	その他	合計
第1期	1938	(4)2							(4)2
	1939	(1)	1						(1)1
	1940	(12)11	1		(6)4				(18)16
	1941	(11)12			(1)	(3)10		(1)	(16)22
	1942	(3)2	(4)1						(7)3
	1943	(10)5	(4)1		(1)2				(15)8
	1944	(25)14	(2)1						(27)15
第2期	1945								0
	1946								0
	1947					(2)3			(2)3
	1948	(1)	(2)2						(3)2
	1949	(9)4	(3)1	(1)	(5)5				(18)10
	1950	(2)4	(7)		2				(9)6
	1951	(5)2	(4)3	(4)3	(8)2				(21)10
第3期	1952	(4)1	(5)4	(1)			2		(10)7
	1953	(3)2	(6)	(2)	(2)				(13)2
	1954	(2)4	(4)3	2	(1)3				(7)12
	1955		(4)3		1				(4)4
	1956		(5)6	(1)					(6)6
	1957	(1)2	(4)2						(5)4
	1958	7	(6)3						(6)10
第4期	1959		(3)2						(3)2
	1960	(1)4	(1)5		1				(2)10
	1961		(1)						(1)
	1962	(1)3	(2)3	(1)1	3				(4)10
	1963	(2)1							(2)1
	1964	(2)6	(2)4		2				(4)12
	1965	1							1
第4期	1966	(1)6	(2)1						(3)7
	1967				(1)1				(1)1
	1968		(1)1	(1)	(3)2				(5)3
	1969		(1)		(1)4				(2)4
	1970								0
	1971	(1)2			1				(1)3
	1972	(1)							(1)
第4期	1973	1			(1)1				(1)2
	1974								0
	1975				1				1
	1976				2				2
	1977		(1)		(2)			(1)	(4)
	1978				(2)3				(2)3
	1979	1						(1)	(1)1
熊谷没後	1988(?)	1							1

入手時期 未判明分	日本画	洋画	水彩・素描	書	工芸	彫刻	その他	合計
	5	1		2	1	1		10